

目的 我々は従来判断が困難であったへらじるしの強弱の程度について客観的基準を得ることを検討してきた。第1報ではへらじるしの強さの評価法について、第2報では好ましいへら圧の程度について報告した。

今回は、布地の色によってへらじるしが濃くみえたり薄くみえたり異ってみえることとしばしば経験するので、布地の色とへらじるしの強さの関係を調べた。

方法 試料布には同一諸元よりなり、布の色の異なる市販の和服用反物を用いた。布地の色は、黄、緑、赤、紺の4種であり、それぞれ色の濃淡は4段階で合計16種類の色の布を供試布とした。これらの布地に前2報と同様自動へらつけ巻を用いてへらじるしをつけた。へらつけ条件、へら圧、触針法によるへこみ量測定などは全て前報と同様である。

一方、和服裁縫専門家によりへらじるしの強さの程度について官能検査をおこなった。

それらの官能評価値を試料布の各種測色値と比較し、へらじるしの強さの判断にあたって色がどの程度関与するかを検討した。

結果 へらじるしの強さの官能評価値は各試料間において有意を示し、布地の色によってへらじるしの強さの判断、評価がことになった。その官能評価値と明度、擦度との間にはあまり相関関係は認められなかった。白度との間には若干の関係が認められたがはっきりした傾向はつかみにくかった。これに関しては試料数をふやし更に検討する必要があると思われる。各試料群における色の濃淡では、色が濃くなると官能評価値は大きくなる傾向であった。